実用から鑑賞へ 美術品としての日本刀

公益財団法人 黒川古文化研究所
川見 典久氏

日本刀は、わが国における鉄の最高傑作の一つと言えるでしょう。一見同じように見えても、時代や地域、流派などによって異なり、一振り一振りに特徴があります。

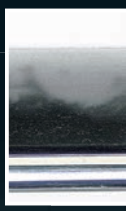
そもそも日本刀は戦場で相手を倒すための武器でした。しかし、そうした実用性のほかに、美観も魅力の要素として挙げられます。つまり刀は単なる鉄製の刃物ではなく、武器のなかでも特別なものでした。現在でも、日本刀には美術品としての高い価値があります。その背景には刀工たちによる実用性の追求、美しさを表現するために重ねた試行錯誤、さらには銘を刻んで作品として世に送り出した自負心があると考えられます。

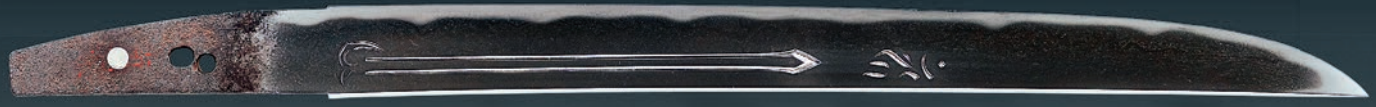
日本刀を鑑賞するときのポイントは大きく地鉄（じがね）、姿形、刃文（はもん）の3つです。地鉄とは、鉄を折り返し鍛錬（たんれん）する工程で現れる刀の肌模様のことです。人間の指紋のように同じものは二つとなく、色や映（うつ）りなども微妙に異なります。刃の反り具合や先端部分、身幅の変化といった姿形にもそれぞれの特徴があるので、ぜひ見比べてください。そして、一番の見どころが刃文です。のたれ、互（ぐ）の目、丁子（ちょうじ）など、さまざまな種類があり、時代ごとの特徴や刀工たちのこだわりが見られます。

日本刀には専門用語が多く、入門書や展覧会の解説を読んでも内容を理解できないことも少なくありません。初めに知識を得ようとするのではなく、まずは実物を見ることが何よりも良いと思います。地鉄、姿形、刃文にどのようなものがあるのかを実際に目で確かめることで、刀工たちの精神や先人たちが切磋琢磨してきた技術の奥深さを感じ取ることができるはずです。

重要文化財　刀 無銘(伝 長谷部国重) 南北朝時代(14世紀)　© (公財)黒川古文化研究所

身幅が広く、反りの浅い形状で、切先の大きな豪壮な刀。まっすぐに刃が入る直刃(すぐは)とは異なり、波打って見える乱刃(みだれば)で、互(ぐ)の目や丁子(ちょうじ)が交じる華やかな刃文です。刃長78.4センチ、茎(なかご)長(柄に覆われている部分の長さ)21.2センチ



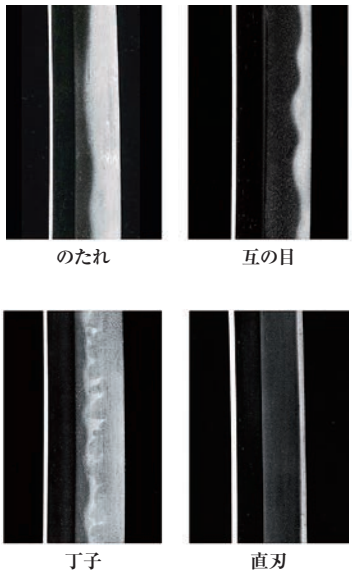


国宝　短刀 無銘(名物 伏見貞宗) 鎌倉時代(14世紀)　© (公財)黒川古文化研究所

身幅はやや広く、反りがわずかについている。木の年輪のような板目(いため)肌がやや流れて、たなびく雲のような美しい地鉄となっている。刃長30.2センチ、茎長9.2センチ

昨今の刀剣ブームで当館にも女性の姿が多く見られるようになりました。しかしブームは一過性の出来事に過ぎません。肝心なのは背景にある歴史や文化、人々のこころであり、それを鑑として自分自身の生き方を考えていくことだと思います。日本刀をはじめとする古い時代の作品が、それぞれの人の自己を見つめるヒントになれば、うれしく思います。(談)

川見 典久(かわみ・のりひさ)
1976年生まれ。関西学院大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期課程単位取得満期退学。現在、黒川古文化研究所研究員。中世和鏡や近世刀装具など日本金属工芸史を中心に研究している。著書に『刀装具ワンダーランド』(創元社)がある。



刃文の種類　© (公財)黒川古文化研究所

第118回展観
名物「鳥飼来国次(とりかいらくにつぐ)」受贈記念

刀剣のかがやき
刀装具のいろどり

◉2017年10月14日(土)～11月26日(日)(月曜休)

会　場	公益財団法人 黒川古文化研究所 (兵庫県西宮市苦楽園三番町14-50)
アクセス	タクシーで阪急夙川(しゅくがわ)駅より約10分、JR芦屋駅より約15分
開館時間	午前10時～午後4時
料　金	一般500円、高大生300円、中学生以下無料

http://www.kurokawa-institute.or.jp/newpage2.html

※ 春と秋に展覧会を開催